

# 対話型鑑賞 「考える力」育む

\* 大阪の展覧会

美術館などでアートを鑑賞しながら、感想を話し合う「対話型鑑賞」と呼ばれる取り組みが、教育現場や医療従事者の間で広がりつつある。子どもたちの考える力や、職場で必要な周囲への観察力を養う効果も期待されるといふ。大阪府立江之子島文化芸術創造センター（大阪市西区）で開催中の「なにわの企業が集めた絵画の物語」展（関西経済同友会主催）を取材した。（林華代）

「今日はじっくり絵を見てみんな話しましょう。」1月29日、対話型鑑賞プログラムに参加した大阪市立堀江小学校の6年生約20人を前に、進行役の京都造形芸術大学の学生が語りかけた。展覧会では、企業20社が所蔵する44点を展示。ほとんどは、一般公開されていない作品だ。鑑賞したのは藤田嗣治の「パリ」（コクヨ所蔵）。

## 教育や医療職場で活用



藤田の特徴である乳白色ではなく、暗い緑や灰色で広場で遊ぶ人物や木が描かれている。児童からは「灰色だから冬」「雲が波打っているから、台風が来る季節かも」などの声が上がった。

参加した武田美悠さん（12）は「普段は絵について友達と話し合うことはない。いろいろな感想が聞けて面白かった」と喜んでいった。

ニューヨーク近代美術館で開発されたプログラムを源流に、京都造形芸術大の福のり子教授らが研究し、「みる・考える・話す・聴く」を軸に藤田嗣治の「パリ」を学生の案内で鑑賞しながら、児童たちが感想を語り合った（1月29日、大阪市西区）

美術史などに頼らない鑑賞法として提示してきた。対話を通して読み解くことで、鑑賞力や観察力が向上するといわれ、医療、福祉関係の職場、企業や教員免許状更新の研修でも導入が進んでいる。

参加者へのアンケートでは「みる・考える・話す・聴くを繰り返すことで観察力などが育つのではないか」と歓迎している学校関係者の声もあったという。

兵庫県立美術館の養豊館長は「大切なのは知識ではなく、感じたことを話し、他人の意見を聞くこと。『答えは無数にある』という気づきが生まれ、考える力や創造性が育まれる」と評価している。